

C年特定17 ルカ14章1・7-14節

〔直訳〕

1 そして 起こった

行くことにおいて 彼が 家の中へ ファリサイ派のある指導者の
安息日に 食べるために パンを
そして 彼らは 様子をうかがい続けていた 彼の。

7 だが、彼は言っていた 招かれている者たちに対して たとえを、
知って どのように 上座を 彼らを選ぼうとするかを、
言いながら 彼らに対して、

8 「ときは あなたが招かれた 誰かによって 婚宴に、
座らないようにしなさい 上座に、
ないように あなたより身分のある人が 招かれている 彼によって、

9 そして 来て
あなたと彼を招いた人が 言うだろう あなたに、
『与えなさい この人に 場所を』
そして そのとき あなたは始めるだろう 恥辱と共に
最後の場所を 占めることを。

10 そうではなく
ときは あなたが招かれた、
行つて 腰掛けなさい 最後の場所に、
ように とき 来た あなたを招いている者が
彼は言うだろう あなたに、

『友よ、上がりなさい より高く』
そのとき あるだろう あなたに 栄光が
すべてのあなたと一緒に腰掛けている者の前に。
11 なぜなら すべて自分を高くする者は 低くされるだろう、
そして 低くする者は 自分を 高くされるだろう。』

12 だが、彼は言っていた 彼を招いている者にも、
『ときは あなたが行う 昼食会を あるいは 夕食会を、
呼ぶな あなたの友だちを またあなたの兄弟を
またあなたの親戚を また豊かな隣人を、
ないように 彼らもまた 招き返す あなたを
そして 生じる お返しを あなたに。

13 そうではなく
ときは 宴会を あなたが行う、
招きなさい 貧しい人たちを、体の不自由な人たちを、
足の不自由な人たちを、目の見えない人たちを。

14 そして あなたは幸せであるだろう、
というのは 彼らは持たない 返礼することを あなたに、
なぜなら、それは返礼されるだろう あなたに 義人たちの復活において。』

〔新共同訳〕

1 安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。

7 イエスは、招待を受けた客が上席を選ぶ様子に気づいて、彼らにたとえを話された。8 「婚宴に招待されたら、上席に着いてはならない。あなたよりも身分の高い人が招かれており、9 あなたやその人を招いた人が来て、『この方に席を譲ってください』と言うかもしれない。そのとき、あなたは恥をかって末席に着くことになる。10 招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、『さあ、もつと上席に進んでください』と言うだろう。そのときは、同席の人みんなの前で面目を施すことになる。11 だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」12 また、イエスは招いてくれた人にも言われた。「昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。13 宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。14 そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる。」

①構成

① a 1節「そして起こった…」。この文章はルカが好む構文。次の三つの要素から成り立つ。

① ⑦「そして起こった」(一行目)

① ①時を示す表現(二―三行目)

① ⑨出来事を表す表現(四行目)

意味は「①の示す時に⑨の出来事が、⑦起こった」となる。一種の強調表現で、段落の冒頭や段落の頂点にこの構文が使われるのが普通。

① b 7―11節。8―9節では招かれた時に取ってはならない態度が書かれ、10節では取るべき態度が指示される。この二つの指示はまったく同じ構文で作られている。二重線で示したように、まず時を示す従属節で始まり、次に命令形によって指示が書かれ、続いてその指示を実行する目的を述べ、最後に結果を語っている。同じ構文を繰り返すことによって、上座を求めず、末席に向かうべきだという指示を強調している。11節は10節以前に「たとえ」として述べられた指示の根拠を明らかにしている。

① c 12―14節。この段落では食事に客を招く時の心得が教えられるが、前の段落と同様、呼ぶべきではない人についての指示と招くべき人についての指示とが、ほぼ同じ構文を使って示されている。たった一つの違いは、14節の「そして」である。14節三行目は、前の段落の11節と同様に、指示の根拠を示していると思われる。

②安息日の食事(1節)

① a 安息日は何よりも礼拝の日であり、神殿ではいけにえが捧げられ、会堂では祈り・聖書の朗読・

説教が行われた(ルカ四16、使一三27、一五21)。新約聖書では、安息日の会堂がイエスや使徒たちの福音宣教の舞台として登場する。

⑥会堂での安息日の礼拝が終わった後に、安息日の食事に人を招待することはよくあることであった。「様子をうかがう」と訳した動詞パラテレーオーは「誰かの行為を」注意深く見つめる」の意味だが、文脈によっては「待ち伏せする・悪意を持って見張る」の意味にもなる。人々はイエスの振る舞いを悪意をもって観察するが、7節以下では、逆にイエスが彼らの振る舞いにひそむ自己中心的な行動をあばき出す。

③招かれた者は(7―11節)

⑦7節「たとえ」。イエスは招かれた人々が上座を好む様子を見て「たとえ」を語り出す。厳密に言えば、イエスはここでたとえを語ったのではなく、宴会での作法を教えている。しかし11節で明らかにされるように、それが単なる作法にとどまらず、同時に神の前で人が取るべき態度、キリスト者のあり方にまで及んでいるので、「たとえ」と呼ばれたのだろう。

⑧宴会での席に座るかはその人の名譽に関わることである。8―9節でイエスは、もし上座に着いた後で、末席に移るようになると言われたら、恥をかくことになることになると警告し、10節では、むしろ末席に着きなさいと教える。そうすれば、「栄光」、つまり名譽を得ることにつながる。これは処世術であり、生活の知恵だと言える。

⑨しかし11節の言葉によって、それは作法を教える処世術では終わらず、神の国の秩序を指し示す「たとえ」に変わる。「低くされるだろう」も「高くされるだろう」も受動形であるが、神が低くし、高くする行為者であることを示す神的受動形である。従って、「上座ではなく末席に」と教える生活の知恵を通して、神から「栄光」を受けるための知恵をイエスは語っている。高ぶる者は低くされ、自分を低くする者は高められるのが、神の国の秩序である(二二26―27)。

⑩10節には「栄光」を意味するギリシア語、ドクサが用いられている。この語は多くの場合、宗教的な意味合いで使われ、「神的な威厳・栄光」を指すが、「誉れ」(ヨハ五41・44)、「面目」「繁栄」(マタ四8、ルカ四6)の意味でも用いられる。10節までのたとえが単なる作法や処世術であるなら、10節は「面目を施すことになる」の意味になるが、ここには神から受ける「栄光」が暗示されており、神の国の「栄光」に入るために必要な態度を述べていることになる。

⑪「低くする(タペイノオー)」は形容詞タペイノス(低い)の動詞形。タペイノスが人間の社会生活や内面生活にも使われるように、タペイノオーも心の状態を表し「へりくだらせる・貧しくする・気落ちさせる・卑しくする」の意味にもなる。古典ギリシア語でこれらの語が人間に使われる場合、「低い」ことは、一般に無力さや貧しさや道徳的な卑しさの象徴とされ、恥として避けるべきことと見なされた。だが、七十人訳はこれらの語を神と人間の適切な関わりを表すのにしばしば使ったので(詩五一19、一一九67・71など)、「低い」ことは積極的な意味を持つことになる。新約聖書も、こうした七十人訳の用法を受け継いでいる。

④招く者は(12―14節)

⑫12節「招いている者」と7節の「招かれている者たち」は同じ動詞の完了能動分詞と完了受動分詞。この対応からも、8―11節と12―14節が対になったたとえであることがわかる。「呼ぶ

な」は「招く」と訳されている語とは別の動詞で、文字通りには「声を出す」を意味する。行為の反復・継続、あるいは習慣化した行為を禁止する形であり、「呼ぶのをやめなさい」の意味となる。口頭で行われる習慣化した招待では「友人・兄弟・親類・近所の金持ち」が呼ばれるが、それが禁止されている。

⑥この段落では、前の段落(8―11節)とほとんど同じ構文を使って、客を招く者への忠告が語られる。「あなたの友だち」「あなたの兄弟」「あなたの親戚」とは、自分を中心にした血縁、地縁によって結ばれた人々である。また「豊かな隣人」という表現には、「あなたの」が省かれており、しかも冠詞がないので、親しくつき合う人ではないと思われる。親交がないのに、金持ちを呼ぶのは、自分の名誉のためである。

⑦親しい人や豊かな人を招けば、お返しがあるだろうから、その宴会は自分の利益のための閉ざされた交わりになってしまう。イエスはむしろ、報いを期待できない人々を招くべきだと教える。「返礼することを持たない」の時は現在であり、「返礼できない」の意味。「返礼されるだろう」も受動形であるが、これも神が返礼することを示している(11節参照)。時は未来。宴会に招いた人から返礼を受けなくても幸いなのは、将来、神が返礼するからである。

⑧14節の二行目と三行目に理由を表す語(というの・なぜなら)があり、二行目の動詞が現在であるのに対して、三行目の動詞は未来形である。貧しい人・体の不自由な人・足の不自由な人・目の見えない人を招いたあなたは幸せである。なぜなら、今は彼らが返礼できなくとも、将来、神が返礼してくれるから。

⑨12―14節は8―11節の構文と同じであるが、ただ一箇所違って、10節では「ように」という接続詞を使って、末席に座る目的が示されている。上席を勧められる「ように」と末席に座る。これに対して14節では、返礼できない人々を招いた後に起こることが、「そして」という単純な接続詞によって導入されている。貧しい人を招きなさい、「そして」幸せであるだろう、という意味になる。

⑩末席に座るといふ行為と上席を勧められるという結果は密接につながっているが、貧しい人の招待と幸いとは、必然的なつながりがあるのではなく、ただ神が働くことによって幸せが生じる。人間は神に返礼を要求できないから、神への深い信頼がなければ、貧しい人や体の不自由な人を招くことはできない。21節によれば、神自身が貧しい人や体の不自由な人を宴会に招いている。この神に信頼し、神からの祝福を待ち望む生き方こそ、朽ちることのない栄光を受けるための真の知恵なのである。

⑤神がその返礼を行う

⑪人間的な「栄光」を大事にする者が、人を招いたり、人に招かれたりすれば、自分の利益が最大の関心事になり、人からの栄光を期待することになる。人からの栄光を期待することではいっばいになれば、神の働く余地がなくなり、神からの栄光が期待できなくなり、神との関わりの中で生きる者ではなくなる。

⑫人からの栄光から目を離し、神からの栄光を見つめるために、イエスは「自分で返礼することのできない者」を招くようにと教える。神はそのような力のない者と共にあり、彼らが神の国食卓にあずかることを喜ぶ方だからである。